

## 中国における日本NGO活動の問題と可能性 ——緑化協力団体を例に——

Japanese NGOs in China: perspective of environmental NGOs

開発ジェンダー論コース 倉持 幸恵 Sachie KURAMOCHI

近年日本のNGO（広義；公益活動に従事する非政府・非営利団体，狭義；広義の内面で国内活動に従事する団体），NGO（広義NPOのうち途上国で活動する援助団体）活動は注目を浴びているが，その情報は比較的少なく，団体の内面を実際の活動と結びつけて問題とする関心は薄かった。本稿では，事例『緑の地球ネットワーク（GEN）』（中国山西省大同市で緑化活動を行なう日本のNGO）をとりあげ，ツアー・学習会・世話人会等の参与観察，聞き取り，アンケート，団体資料などをもとに，対中協力を望む日本のNGOが抱える問題と，今後の活動の可能性を探ることを目的とした。

日本NGO・NPOの起点を1960年代の市民運動とし，ゆるやかに「世代」という区分で捉えると，60年代の「団塊世代」，80年代の「新人類」，それ以後の「団塊世代ジュニア」は，同じテーマで活動をして，各々が異なる時代体験と興味・関心，スタイルを持っていることに気づかされる。

団塊世代が中心にいる「団塊世代型NGO」は精神的に活動を進めてきたが，その「わかりあえる仲間意識」の重視は結束力を生む反面，「気のあう人としか活動しない」という「異質な者」の排除，自分達の団結に「他者」を利用すると解釈できることも少なくない。「団塊世代型NGO」の強さの一端を支えてきたこの仲間意識と，「異質な者」も快く受け入れるNGOイメージの堅持というジレンマが，その傾向の一つとして捉えられよう。「異質な者」は他世代（特に若者）とされやすく，それは，団体の後継者が見つからない，賛同者の裾野が広がらずに団体が安定しない，などの具体的な問題へと繋がる。GENにもその傾向は見られる。

また情報源の限定は，活動の個人への集中，決定権の集中へと繋がるが，NGO・NPOではそれは中心人物への「信頼」に置きかえられる。GENも，現地活動への高い評価の反面，団体が

内側に抱える不安要素は決して小さくない。

これと異なる運営方法の団体も多いが，参加者を混乱させる原因にNGOイメージがあげられよう。NGOに好意的な報道が多いマスメディアと，団体の体験・成果を使って理解を得るNGOが，ボランティア（誰にでもできる），市民社会（政府と違う），ネットワーク（命令でない）などのイメージを増長する。それは政府・企業批判と重なり，開発学や環境問題が後押しをしていると言える。

このような内情を抱えるNGOだが，現場での問題と対処はそのイメージと合致しない場合も多い。「国益と無関係」から「国と無関係」と解釈されることもあるが，GENの例では，現地活動の端々で被援助者（事例では中国人）から求められたのは，「日本人としての態度」であったと思われる。また，中国政府機関との関係もマイナスばかりではない。GENの例からも，政府機関内での人的ネットワーク，幹部個人の理解が，実際の緑化にも現地の体制づくりにも，農民と行動するためにも鍵となることがわかった。

中国のNPOは政府にも必要とされ，中国社会にも影響を与えているが，政府との緊張や団体運営の問題も抱えており，現段階では海外援助の受け入れ体制はまだ整っていないという見方が強い。

NGO・NPOの性格は様々で，一部の団体は不安定さを抱えている。また，在中NGO活動へは日中関係も大きく影響している。今後，環境問題に関して政府の寛容（「隙間」），行政機関・半行政機関へ広がる人的ネットワーク（「公共空間」）は期待できよう。「民間」に期待が込められやすいが，日本NGOの持つ脆さと，中国の政府・準政府機関への可能性も考慮すべきである。それは，「市民社会」とネオリベラリズムへも疑問を呈しよう。「民間神話」「市民神話」にのまれずに，個々に対処する姿勢と柔軟さが，求められていると言える。